

ハワイでひらひら



2011.5.27-29 Aloha Art Week (アメリカ合衆国ハワイ州ホノルル)

シャツアート展



モンゴル・ハワイで開催された経過や、世界に通用する砂浜美術館のコンセプトに迫ります。

(写真協力・砂浜美術館)

これはなに？

ハワイ・オアフ島に、今年初めて上陸したTシャツアート展。

現地の人々は、突然公園に現れた約800枚のTシャツを見て、驚きながらも興味津々に近寄ってきました。「これはなに？Tシャツアート？作者はアーティストなの？Tシャツは売っているの？」と次々に質問。そして、日本・ハワイの芸術家や一般の人々が応募したオリジナルデザインをTシャツに印刷したものと説明すると、納得して、1枚1枚のTシャツを丁寧に見て回っていました。

きっかけの出会い

ハワイで展示する話が持ち上がったのは、2009年2月。Tシャツを作っている久米繊維工業株式会社（東京）の久米信行さんが、株式会社アロハ・ラボラトリー（東京）の篠原健仁さんとNPO砂浜美術館・事務局長の村上健太郎さんを引き合わせ、「ハワイでもTシャツアート展ができればいいね」という話が出ました。その後、篠原さんがハワイ州観光局に企画を提案し、やりとりを重ね、2010

年12月に「2011年5月のハワイの音楽イベントと同日開催する」ことが決定しました。

開催に当たっては、ハワイ州観光局の協力のもと、スタジオ・リム（ホノルル）の日本人スタッフが現地プロデュースを担当。開催前日、日本から砂浜美術館スタッフがTシャツと一緒にハワイへ渡り、ボランティアア々と展示して、いよいよアメリカ初のTシャツアート展が始まりました。

カットもPR

展示された作品は、ゴールデンウィークに黒潮町入野の浜で展示されたTシャツのうち、モンゴル交流Tシャツ（モンゴルの子どもと黒潮町内の小学4年生の作品※）を除く740枚と、ハワイの協賛各社のオリジナルTシャツ約30枚。黒潮町から持っていたカットTシャツやパンフレットも、ハワイの人たちに大人気でした。



※モンゴル交流Tシャツは、今年6月・7月にモンゴルで展示するため、5月中旬にモンゴルへ旅立ちました。

モンゴルでひらひら



2010.7.24-27 Tシャツアート展 in MONGOL (モンゴル国ウランバートル市近郊)

世界を旅するT



1989年の夏から23年一。黒潮町入野の浜から、世界に広がりを見せているTシャツアート展。

はじめはモンゴル

ハワイより一足早く、2010年7月、モンゴルの大草原でTシャツアート展が開催されました。同年5月に黒潮町で展示したTシャツ1341枚と、追加募集の作品約80枚を、草原の電柱に結んだロープに通して展示。背中合わせに2列に並んだTシャツは、長さ700メートルにもなり、草原の風にはためきました。

きっかけの想い

モンゴルで開催したきっかけは、2006年5月にTシャツアート展のボランティアとして参加した西村優美さんが、「このすばらしい風景をモンゴルの草原で再現したい」と考えたから。JICA（ジヤイカ）青年海外協力隊としてモンゴルに渡った西村さんは、活動先の小学生の絵5点を2008年Tシャツアート展に出展。これが、モンゴルから最初の応募になりました。

その間も、モンゴルでの開催に向けて西村さんは周囲に想いを語り続け、次第に賛同してくれる仲間を増やしていきました。

子どもたちの交流

2009年からは、砂浜美術館の協力で、入野小学校4年生とモンゴルの子どもの交流が始まりました。5月、モンゴルから届いた児童・芸術家の作品90点が黒潮町で展示され、その後モンゴルへ。8月29・30日、モンゴルで初めてのTシャツアート展が開催されました。しかし、この時は草原ではなく首都ウランバートル市内の広場での開催でした。

草原美術館

それから1年、ついに、モンゴルの大草原でのTシャツアート展が実現しました。記録的な猛暑の中、JICA隊員やボランティアの協力で開催初日のお昼ごろやつと展示が完成。日本とモンゴルの約1400枚のTシャツが大草原に展示された光景は、自然の大きさとともに、Tシャツアート展の無限の可能性を感じさせました。

ここから、Tシャツアート展の世界の旅が始まったのです。



砂浜美術館という考え方



こうして、外国でも開催されるようになったTシャツアート展ですが、23年前、どのように誕生したのでしょうか？

それはこの「砂浜美術館ノート」に詳しく書かれています。



1997年3月31日砂浜美術館が発行した記録誌。

そもそものきっかけ

物語は、1989年の5月20日、旧大方町役場の若手職員2人が、町の振興計画のデザインを依頼するためにデザイナー梅原真さんと出会ったところから始まります。梅原さんは、これより前に「松原サミット」の企画書を町に提案していました。この企画書の中に、「シーサイドギャラリー」と「Tシャツアート展」が出ており、梅原さんとの打ち合わせは、振興計画の話が終わるとTシャツアート展の話に移行。「大方町でTシャツアート展を！」と意気投合し、6日後には、担当職員3人と梅原

さんで、町長に企画のプレゼンを行っていました。

みんな作品

町長に、Tシャツアート展の考えを説明しても、いまひとつ説得力に欠けていたところへ、職員の1人が「別にTシャツや砂の彫刻だけが作品と考えなくても、沖を泳いでいるクジラも、松原も、みんな作品として考えたらええと思う」と一言。これがカギとなり、町長のゴーサインが出て、議会へ提案し、同年8月13〜15日の第1回目の開催にこぎつけたのです。

「私たちの町には美術館がありません。美しい砂浜が美術館です」という砂浜美術館のコンセプト（基本的な方向性）は、こうして生まれました。

町を楽しむ考え方

「砂浜美術館」は、黒潮町で生まれた「考え方」です。日ごろ当たり前目にしている砂浜や自然の景色が、Tシャツを展示することで違ったものに見えてくるように、この考え方に立てば、発想の転換で町を楽しむことができます。

ハワイでの

Tシャツアート展を終えて



NPO砂浜美術館
事務局長
村上健太郎さん

世界中のどこでもTシャツを展示すればこんな風景が作れる。国が違っても砂浜美術館の考えに共感してくれる人がいるということは、世界に通じる共通の価値観が元になっているのだと思う。ひとつの町の取り組みが、世界とつながっていくことのすばらしさを感じた。今後、この考え方に共感してくれる人がいれば、他の国ともつながっていきたいが、毎年どこかの国で開催することは考えていない。来年は、黒潮町で、町の人たちと盛り上げるTシャツアート展にしたい。

この概念をかたちにしたイベントの1つがTシャツアート展で、その楽しみ方はいろいろ。絵や写真など、作品を応募したり、ボランティアとして展示を手伝ったり、砂浜をぶらぶらしながらTシャツを見たり…。来年は、皆さんも一緒に楽しんでみませんか？